

目連救母説話とその絵画

——目連救母経絵の出現に因んで——

宮 次 男

一 緒言

目連救母の伝説が、中国、朝鮮やわが国において広く流布し、仏教的行事ばかりでなく、芸能、文芸、美術など広い分野にわたって、民間に浸透し、親しまれてきたことは周知である。

この説話の基づくところは、『孟蘭盆経』であるが、これが中国における孝子思想と結合して、説話的發展がとげられ、唐代では変文の主要テーマとなった。更に、時代が降るにつれて、俗文学、戯曲などにもとり入れられてその作品はかなりの数にのぼっている。

わが国にあってもこの説話が仏教渡来の初期からすでに知られていたことは想像に難くないが、これが文芸にあらわれるのは平安時代になつてからであろう。すなわち、永観二年(九八四)の『三宝絵詞』をはじめ、『源氏物語』(「鈴虫」)、『宝物集』にこの説話の一端を窺うわけで、『餓鬼草紙』⁽²⁾においては、これの絵画的表現の一例をみる事ができる。しかし、いずれもごく簡単な記述か、『孟蘭盆経』の抄訳にすぎない。

目連救母説話とその絵画

降って、正嘉元年(二二五七)の『私聚百因縁集』や、一四、五世紀の交に成立したといわれる『三国伝記』所収の話になると、説話としてのまとまりがついてくる。そして室町以後のお伽草子や語り物にこの説話はとり入れられて、日本的な目連説話の展開が示されてくる。

中国及び日本における目連説話の展開過程は、すでに諸先学によって論じられているので、ここでは深くふれないが、たゞ岩本裕氏⁽⁴⁾がすでに指摘しておられるように、目連救母の説話は『私聚百因縁集』と『三国伝記』の間に、かなりの飛躍、或いは断絶があることは、わが国における目連救母説話の展開を考へるうえに注意すべきことといえよう。

すなわち、『私聚百因縁集』は末尾に「委如孟蘭盆経説」と記していることから知られるように、『孟蘭盆経』に基づいて記述して、目連が母を餓鬼道から救うことが主要テーマとなっているのに対し、『三国伝記』は、目連の生家の状態から生前の母の不善、悪行を述べ、更に死後の母を地獄、餓鬼、畜生の三悪道を経て救うという構成になっている、その内容も比較にならぬ程豊富となり、たんに『孟蘭盆経』の

説話を発展させただけではなく、そこには中国における変文などの俗文学の影響―それもかなり強い―があつたのではないかと考えられるのである。

この断層をうづめるものとして、従来の『孟蘭盆經』による所伝とは異つた話を引用した『河海抄』の記事が注目されている。すなわち、『河海抄』は『源氏物語』の「鈴虫」の巻の一節を註釈して、

目連救母經に見えたり。目連母地獄に墮せしをすくひて次第に餓鬼畜生道より天上に生ぜし也。

と記し、さらに、

孟蘭盆經免一切餓鬼之苦。……孟蘭盆經云落餓鬼中。目連救母生天經云大焦熱地獄中。二經參差する歟。但救母經大藏目錄外也。

と述べている。

この記事によれば

『河海抄』の編述された南北朝の貞治年間（一三六二―六七）にはすでに『目連救母經』

或いは『目連救母生天經』なる文献がわが国にあつたことは間違いない、それを『孟蘭盆經』と対照していることは興味深い。

本稿でのべる『目連救母經』の存在については、従来あまり知られていないようであるが、私は最近、京都金光寺の武田賢善師に『目連救母經』なる絵入りの版本を示され、それを調査、検討するに及んで、これが『河海抄』所引の『目連救母經』に内容的に近く、恐らく同一本と思われ、目連説話の展開を考える上に重要な文献であり、特に『三國伝記』所収の目連救母説話とは密接な関係があることを知るに至った。更に、これが絵入りであることは、日本及び中国の地獄絵を考える上に重要な資料でもあり、また、中国の変文とも関連すると考えられる。特に、敦煌変文の『大目乾連冥間救母変文并図一卷』が、現在図を逸しているため、本經はこれの原初の図様を推察するに資するところ大きいと考える。

そこで、ここに『目連救母經』を紹介し、あわせてこれについての私見をのべたいと思う。⁽⁶⁾

二 目連救母經の内容

この經は伊勢神宮関係の夢想記の紙背に墨版で刷られていて、内題に「仏説目連救母經」とあり、現在卷子装となっている。全十三紙よりなり、見返し及び奥書をもち、首尾完備している。その法量は別表の通りである。

本紙は上、下二段に区分され、絵因果經のように、上段に絵、下段に

経文が書かれている。上段は、縦一〇・三センチ(欄外五センチ)、下段は一一・七センチ(欄外五・三センチ)で、総計三三・三センチ(欄外を除くと二三センチ)となる。下段経文は一行一二字詰となっているが、七行(約一一・二センチ)を単位に、少し行間が広くとられている。絵の場面転換や区切りの箇所も、この行間の広いところで行なわれているから、折り本の形をとっても通用できる。むしろ、これはこの原本が折り本であったことを示すものである。

画面には随所に短冊乃至色紙形に「………処」と場面説明の題辞があり、下の経文内容を絵画化していることは明らかである。

巻末には奥書(公刊参照)があつて、元の辛亥の年(二五二)に程季六なる人が造った刊本を、大徳八年(二三〇四)に某が広州にて購入した。これを日本の貞和二年(一三四六)七月一日に法祖という僧が重刊したとこの経の来歴が知られ、その時の助縁に嶋田、理在、空念、周皎、理住、石塔、赤松、細河、佐々木が名を列らねる。(以上木版刷)更に、永禄元年(二五五八)三月当時、仙誉祖宝なる僧の所持であったことを墨書銘によって知ることができる。また、軸付に刷られた奥付により、京五条坊門の大蔵房が版元で、その造経の料は八十文であったことが知られる。なお、巻初の上段欄外に「金方庵常住」と墨書されている。

この経の内容は、公刊の通りであるが、叙述の順序としてその大略を示すと、左の如くである。

「昔王舎城中有一長者。名曰傳相」で始まり、目連の生家と父の人柄から書きおこす。

目連の父傳相は資産家で、人格温厚、篤信の人であった。傳相の死後、羅卜(目連の俗名)は三年の喪に服したのち、財産を三分して、一は母の生活費、一は三宝供養の消費とし、一は自分の商業資本とした。そして三年間国外で商売を行ない、資本金を三倍に増やして帰国した。

羅卜の留守中、母の青提は羅卜との約束を破って、三宝を敬わず、五百僧の齋を設けず、殺生や僧侶に乱暴するなどの不善を積んだ。このことを隣人から聞いて、羅卜は母に確かめたが、母はこれを否定し、若し自分の言葉が偽りであるなら、七日以内に死んで阿鼻大地獄に墮るであろうと誓った。しかし、母は七日を過ぎずに患って死んだ。

羅卜は三年間、母の墳墓のほとりに庵を造って、そこに住み、服喪したのち、耆闍崛山中で釈迦に拝謁、父母の菩提のために出家剃髪して、名を目連と改めた。そして耆闍崛山中に「寶鉢羅庵」を結んで修行し、三十三天を観想して、父を化樂天にみいでしたが、母は何処にも観ることができなかつた。そこで世尊のもとに来て、母の在所を尋ねると、母は在世中、三宝を信ぜず、慳貪積悪であつたため、今は地獄にあると教えられた。

目連はこれを聞いて嘆き悲しみ、母をたずねて地獄遍歴に出発した。先ず、剉確地獄から始めて、劔樹地獄、石磔地獄、餓鬼地獄、灰河地獄、鑊湯地獄、火盆地獄を順次巡つたが、母は何処にもみいだすことができなかつた。獄主に罪人の名簿を検べてもらったが、記載されていないので、次の阿鼻地獄に向つた。

阿鼻地獄は嚴重で、目連の法力では城門を入ることができなかつた。そこで目連は釈迦のもとに行き、十二鍔杖、袈裟、鉢盂を借りてきて、その威力によつて城門を破り獄中に入ることができた。この破地獄のため、獄中の罪人の枷鎖は自から落ち、罪人は解放された。目連はこゝでやつと母（傳相長者妻青提夫人姓劉第四）にめぐりあうことができた。

目連は母の苦をみて、身代りになることを獄主に願ひ出たがゆるされないので、釈迦のもとに詣でて、母の救出法を問うた。釈迦は自から白毫の光を放つて地獄を照らしてこれを破つた。悪所は直ちに樂所となり、罪人はことごとく救出されて天に生じたが、唯青提だけは罪深きが為に小黒闇地獄に移るだけであつた。

目連は諸菩薩、諸僧の齋余の飯をあつめて、母に食べさせようとしたが、母の貪心は改まらず、右手で人を遮り、左手で飯をつかんで、独占しようとした。しかし、飯は口に入ると

同時に猛火となった。そこで目連は、母を救うため、釈迦の教えに従って諸菩薩に請うて大乘經典を転読してもらった。

母はそのために餓鬼中に生じた。しかし、母が飲もうとする恒河の水はたちまち猛火に変わる有様であった。目連は再び釈迦に問うて、その教えにより、諸菩薩に請うて、生命あるものを放ち、神幡を立て、四十九燈を点じて供養した。

母は王舎城中に狗身となってあらわれた。目連は母狗と語って、その苦しみをきき、これを救うため、釈迦の教えに従って、七月十五日に楊葉栢枝を買い求めて盂蘭盆齋を設け、衆僧に施した。

母は遂に狗身をはなれて女身にもどった。そして、目連とともに釈迦を頂礼して、五百戒を受け、天母が迎接して、母は忉利天に生じ、諸快樂を受けることができた。

更に経は、父母の為に、この経を印造し、散施、受持、読誦するならば、三世父母、七代先亡は浄土に生ずるを得ると、この経の功德を述べて終わっている。

以上を要約すると、羅刹時代、出家、地獄巡り、因果応報と仏力による解脱、経の功德の構成要素に大別することができる。このうち最も詳細な敘述は地獄巡りで、この経の一つの見せ場になっていることは云うまでもない。

卷子の upper 段に描かれた絵は経本文に対応するが、画中にその場面、主要人物名が記入されている。このうち場面説明は「………処」と記したものが多く、敦煌壁画などの銘文に共通した形式をとっているのは興味がひかれる。

絵の展開方式は、罫線或いは涌雲で段落をつけ、その間隔は本文七行分を単位にした倍数である。

絵の主題内容は、本文で述べるところを殆んど網羅するものであるが、区切られた場面を絵巻の一段に見立ててこれをのべると、次の如くなる。(※印罫線による段落)

第一段 傳相長者の邸宅※

第二段 財産分割、羅卜出国、青提悪業※

第三段 齋場の仮設、奴僕益利の帰国報告※

第四段 隣人出迎、羅卜の休息、遙拝※

第五段 母の出迎、羅卜の悶絶※

第六段 青提の病室、青提墳墓、羅卜庵中で服喪、羅卜の剃髪、世尊羅卜を摩頂(改名)、目連、寶鉢羅庵で禪定、世尊に母の在所を問う目連、

第七段 剉確地獄、劔樹地獄、石磧地獄※

第八段 餓鬼地獄

第九段 灰河地獄※(紙継ぎか)

第十段 鑊湯地獄

第十一段 火盆地獄※

第十二段 獄門にて目連獄卒に母を問う。多数の獄卒目連を遠望す※

第十三段 獄卒目連を頂礼す

第十四段 獄主罪人名簿を検索す※

第十五段 目連阿鼻地獄に入らず。仏前にて袈裟、鉢、錫杖を賜う。目連獄門を開く。罪人の枷鎖自から落つ。青提阿鼻地獄で責苦にあう。獄門外にて目連青提と会う。青提地獄の責苦を語る。獄卒青提を門内に追い入れる。目連仏所へ飛ぶ。※

第十六段 世尊地獄を破る。獄卒罪人昇天す。黒闇地獄で目連母に施飯す。諸菩薩、経を転読す。

※

第十七段 青提餓鬼に生れ恒河のほとりにあり。点灯、放生供養。※

第十八段 王舎城中で目連狗身の母に会う。※

第十九段 孟蘭盆会を造り、母仏前で受記、天母に迎えられて昇天す。造経所。施経者昇天す。

以上が絵の主題内容であるが、最後に描かれた造経、施経の光景は、

若有善男善女、爲父母印造此經、散施受持誦誦、令得三世父母、七代先亡、即得往生淨土、俱時解脫、衣食自然、長命富貴。

に相当するものである。これは『孟蘭盆經』が孟蘭盆会を行なうことよって得られる功德を説いているのに対応する所説であるが、それが造經等の功德になっているところは、或は法華經の影響が入っているのかも知れない。それはともかく、この造經、施經の功德を説いている目連説話は少く、変文にはみられない。ただ『目連救母出離地獄升天宝卷』⁽⁸⁾は若人書寫一本、留傳後世、持誦過去、九祖照依目連、一子出家、九祖盡生天、と、これの書写の功德についてふれた個所がある。

また、「印造此經」に関しては、『東京夢華錄』卷八・中元節に⁽⁹⁾

七月十五日中元節、先數日市井賣兵器靴、(中略)果食種生花果之類、及印賣尊勝目連經。

とあることからみて、宋代にあつてはすでに印刷された『尊勝目連經』なる經典が七月十五日に市販されていたことが知られる。従つて、「書写此經」でなく「印造此經」と明記していることは、本經を版本として製作すべく最初から意図されていたと考えてよいであろう。

三 中国における目連説話と救母經

目連救母の伝説を扱ったものは『孟蘭盆經』をはじめ、多くの変文、戯曲、宝卷などあるが、それら諸作品と、此經とを比較することは、目連救母説話諸本における此經の位置を考へる上に必要であろう。

『孟蘭盆經』及び『淨土孟蘭盆經』⁽¹⁰⁾では、地獄についての記述はなく、目連の母は餓鬼中に生じ、それが孟蘭盆供養を行った功德によつて解脱できたと説いている。羅卜の出国とその留守中の母の不善は、『孟蘭盆經』は何も述べていない。『淨土孟蘭盆經』及び宗密^(七八〇)四(一)の『孟蘭盆經疏』はこれについてふれている。また、この両書は母を呼んで「阿婆」「嬢」といい、この用語は岩本裕氏⁽¹¹⁾もすでに指摘されている如く、俗文学に用いられる用語である。従つて、これら經典の方が、俗文学によつて刺戟され、内容的にも大きく展開したとみ

ることができよう。

次に、唐代盛行した目連変文と此経との相違はどうか。現在、その存在が知られているものは十六本あるが、これらは系統的に分類すると次の三種に大別することができる。⁽¹²⁾

①『大目乾連冥間救母変文并図一卷』(ロンドン本 s. 2014)の系統(以下『救母変文』と略す)

②『目連変文』(ヘキン本成字九六号)(以下『変文』と略す)

③『目連縁起』(パリ本 p. 2193)の系統(以下『縁起』と略す)

川口久雄氏⁽¹³⁾によれば、①が最も多く、八本あり、②は首尾を欠く残欠本で、本紙わずか三枚、六五行のみである。この三本は幸に『敦煌変文集』⁽¹⁴⁾下に収録されているので、今、これによって検討を加えることにする。

羅卜時代の導入部では、『救母変文』は七月十五日の意義から説きおこして、父の人格、財産等には殆んどふれない。また、『縁起』もこれらは述べないが、その代り、母の人格、財産を記している。『変文』は父母の性質、財産等にふれているが、父の名を摩竭国の長者「拘離陁」としている。

羅卜の出国期間は、『変文』は具体的にその期間を記せず、また、母の誓願についてもふれていない。『縁起』は出国期間を「旬日」、『救母変文』は「旬月」とする。なお財産を三等分することについて、『救母変文』は、はっきりその割合を記していない。

出家して父母を観想する段では、『変文』及び『救母変文』は、母の所在を父から救えられるが『縁起』は自得することになっている。

地獄巡りでは、『変文』は欠文となって知るよしもないが、『縁起』は、阿鼻地獄、餓母の後、孟蘭盆供養によって母が狗身となり、更に諸供養によって天に生ずるはこびとなる。

『救母変文』は、目連が閻羅王、地藏菩薩、五道將軍に会ったのち、地獄を遍歴して阿鼻地獄で母と会い、世尊の破地獄によって母は餓鬼中に生じ、飼母のことがあり、孟蘭盆供養に

よって母は狗身となる。更に諸供養によって女身にもどり、世尊を頂礼した後、天女に導かれて忉利天に生ずる。

経文及び変文にみる目連救母説話の構成は以上の如くであるが、『目連救母経』が地獄巡り以降のところで、母が地獄、餓鬼、畜生、人、天の五趣を巡歴する経過を示しているのに対し、これと同じ過程のものは『救母変文』のみということになる。更に、孟蘭盆供養の行なわれる契機として、『救母経』は狗身からの解脱があげられているが、『縁起』は阿鼻地獄からの解脱（但しここでは餓鬼について述べられていない）であり、他は経、変文とも餓鬼から救う為に孟蘭盆供養が行なわれるという構成になっている。また、造経功德については『救母経』だけにみられる所説である。

人名については、父を『救母経』は「傳相」とするが、『疏』及び『救母変文』は「輔相」『変文』は「拘離陁」とする。尤も、『疏』の場合、

是王舍城中輔相之子

として、目連を「輔相」、すなわち大臣の子としているわけで、『救母変文』が

阿耶名輔相

と、これを人名にしているのとは意味が異ってくる。しかし、「輔」と「傳」は音通であり、「輔相」が「傳相」になることは考えられ得ることである。

母については、『救母経』、『疏』、『縁起』、『救母変文』が「青提」、『浄土孟蘭盆経』が「清提」、『変文』が「靖提」と作っている。しかし、『救母経』が地獄巡りで、

王舍城中傳相長者妻青提夫人姓劉第四

と、青提が劉氏の四女であることを明記している点は、経文や変文では行なわなかった記述である。

以上は、『目連救母経』に先行する経、変文と此経との比較であるが、次に、此経以後に成立した宝卷や戯文などとの比較を行なおう。

元末明初の写本で遺っている『目連救母出離地獄升天宝卷』は、現在流布している『目連宝卷』とは異り、最も古い宝卷である。鄭振鐸著『中国俗文学史』⁽¹⁵⁾下に、これの大部分が引用されているので、以下、それによる。

この『宝卷』は前半部が欠失していて、目連の地獄巡りの途中、阿鼻地獄に至るところあたりから残っている。阿鼻城に入るために目連は、世尊から袈裟、鉢盂、錫杖をかり、その法力によって、開門して母に会う。母は目連に地獄の苦を訴え、目連は世尊に請うて地獄を破ってもらい、母は餓鬼中に生じた。更に、世尊は目連の求めに応じて、母を天に生ぜしめるはこびになっている。しかし、世尊の破地獄以下が『中国俗文学史』では引用が省略され、

此下歷敘目連乞釋迦試法打開地獄之門、救了母親出來、但她卻又到了餓鬼道中、去後目連又求釋迦超度了她升天、最後便以青提的歸心正道爲結束、

と記し、更に本文を引用して

七月十五啓建孟蘭、釋迦佛現瑞光、世尊說法、普度衆生、青提劉四、頓悟本心、永歸正道、便得上天宮……

と続けるので、母が狗身となったか否か、また、孟蘭盆供養がどの時点で行なわれたか、明らかにし得ないのは残念である。

人名については『宝卷』には

我母青提劉第四、王舍城中輔相妻

の句があつて、父については『疏』、母の姓については『救母經』に共通しており、特に母を「劉第四」と記しているのは甚だ興味深い。

更に、この『宝卷』は前述したように、

若人書寫一本、留傳後世、持誦過去、九祖照依目連、一子出家、九祖盡生天、

と、此本の書写、護持を説くが、これは『救母經』に説く造經功德につながる思想である。

次に、明代の目連説話の展開を示すものとして倉石武四郎氏が紹介しておられる『目連救母行孝戯文』⁽¹⁶⁾についてみると、この『戯文』は、母の劉氏の弟劉賈、目連在俗時の許嫁曹氏などの登場があったり、目連の西天への旅行中に西遊記を想起させる事件などあって、かなり内容的に発展しているが、地獄巡りの構成は、地獄―餓鬼―畜生となっており、狗身の母が孟蘭盆供養によって救われるようになっていっている。その点は従来の諸本の中で『救母経』と同じ構想といえよう。また、父の名を「傅相」、母を「劉氏」とし、下僕の「益利」、下婢の「金奴」（救母経は金支）が登場するのも『救母経』と共通している。

以上、間接的ではあるが、明代に行なわれた目連説話の二例をみたわけである。その結果これら明代の宝巻や戯文の構想の中に、『目連救母経』がかなり入っているように考えられる。かかる意味からも、この『救母経』は中国文学において、見すごすことができぬ作品といふべきであろう。

四 三国伝記と救母経

わが国における目連救母説話は、すでにのべた如く、『三宝絵詞』以来、流布されているが、その殆んどが『孟蘭盆経』による構成であった。しかし、『三国伝記』にいたって、飛躍的發展がとげられた。すなわち、『三国伝記』第九、「第一」「目連尊者救母事」における記述は、それまでの諸本と相違して、『目連救母経』に非常に近いのである。

羅卜時代の出国期間も三年であり、従者の名も「益利」としており、母の下婢の名も「金支」となっている。また、目連が出家修行して父母を観想した耆闍崛山中の庵も、「寶鉢羅庵」と名づけているなど、細部にいたるまで一致した名称を用いている。

しかし、地獄巡りでは『救母経』が阿鼻地獄にいたるまでの各地獄について、その状況を詳細に述べているのに対し、『三国伝記』は

目連救母説話諸本対照表 (○印は上欄の救母経と同主題をもつことを示す)

目連救母経	盂蘭盆経 (盂蘭盆経疏)	浄土盂蘭盆経	縁起 (後半欠)	救母变文 (前半欠)	宝卷 (前半欠)	戯文 傳相母	三宝絵詞	因縁集	三国伝記
目連救母経	○	○	母の人格 拘離隋 靖提	○	○	○	○	○	○
父傳相の人格	(輔相)		母の人格 靖提	○	○	○	○	○	○
財産分割			○	○	○	○	○	○	○
羅卜出国	(○)	○	○	○	○	○	○	○	○
母の不善	(○)	○	○	○	○	○	○	○	○
羅卜三年後帰国			旬日	○	○	○	○	○	○
母の誓願と死			○	○	○	○	○	○	○
羅卜出家			父母の死	○	○	○	○	○	○
父母を視想	○	○	○	○	○	○	○	○	○
父化楽天			天上	○	○	○	○	○	○
母不見			○	○	○	○	○	○	○
世尊母の墮地獄を教う			自得	○	○	○	○	○	○
地獄巡り			○	○	○	○	○	○	○
判碓 劍樹			○	○	○	○	○	○	○
石碓 餓鬼			○	○	○	○	○	○	○
灰河 鑊湯			○	○	○	○	○	○	○
火盆 阿鼻			○	○	○	○	○	○	○
母子再会(母姓劉第四)			○	○	○	○	○	○	○
世尊破地獄			○	○	○	○	○	○	○
黒闇地獄			○	○	○	○	○	○	○
銅母			○	○	○	○	○	○	○
転大乘経典			○	○	○	○	○	○	○
母餓鬼中に生ず	○	○	○	○	○	○	○	○	○

放生等供養											
母狗身に生ず										○	
造孟蘭盆供養	○	○	○	○	○	○	○	○			
母女身にもどる	○	○	○	○	○	○	○	○			
母五百戒を受く											
母仏母に迎えられ 切利天に生ず				○	○						
造経等功德											○

即諸地獄行見給、無數罪人有確白劍樹受業、塊石太山感苦、或灰河鑊湯湧沸悲、或火盆鐵床焦
 熱患、言以難述。

と略記するにとどめている。また、狗身となった母が孟蘭盆供養によって救われるという条では、

得孟蘭盆齋、娘忽離「狗身」、生切利天宮、受三諸快樂。

とあって、直ちに昇天することになっている。

この二ヶ所以外は、両者は殆んど一致した内容で、用語、字句にいたるまで共通している所も少なくない。更に、『三国伝記』は、父母を「爺娘」、母を「阿娘」、目連を「郎君」などと呼んでいて、中国俗文学の用語を用いている点も注意すべきであろう。

『目連救母経』と『三国伝記』所収目連救母説話の内容、用語等を比較検討すると、わが国で流布したこの説話は『救母経』を直模して書き改めたといっても過言ではない。目連の父を『救母経』は「傳相」と記し、『三国伝記』が「傳相」としているのも、この間の事情を物語っているとみてよいであろう。また、母についても、『救母経』の

王舍城中傳相長者妻青提夫人姓劉第四

に仿って、『三国伝記』が

王舍城中傳相長者妻青提夫人姓劉也

と記しているのも、前記『宝卷』の記載と比較して、『三国伝記』と『救母経』が一層近い関係にあることを示すといえる。

これによって、『目連救母出離地獄升天宝卷』や『三国伝記』所伝説話は、いずれも『目連救母経』をもととして、それを換骨奪胎して作られていることが判明するであろう。(『目連救母説話諸本対照表』参照)

五 絵画的考察

経巻の紙面を上下に分けて、上に図を描き、下に経文を書く「上図下文」式の絵入経は、すでに古くから行なわれ、わが国の絵因果経は最も古い遺品の一つであるが、唐、五代の中国仏教版画においても、この形式の絵入経は特に民衆に歓迎されていた。また、宋元以後には、この形式は小説の挿絵や、民間用書にも用いられて盛んに用いられたという⁽¹⁷⁾。従って、この経が「上図下文」形式を用いていることは、むしろ当然といってよい。また、京都知恩院の応永三三年(一四二六)刊『出相阿弥陀経』はこの経と同形式の絵入経である。当時、わが国でこの種の経本版画が行なわれていたことを知るに好資料となろう。

絵画作品としてこの経をみると、画面の基本構成は、余白をあまりつくらず、物象がやや密な配置であらわされている。このような充填的な構図法は、中国の経絵⁽¹⁸⁾に共通した方式である。また、画面を区切る方法として、涌雲をしばしば用いているが、かかる方法は中国ではよく用いられたらしく、応永十九年(一四二二)に覆刻された仁和寺蔵『薬師本願経』の見返絵にもみられるところである。

この経の画面で特に注目されるのは、山の表現法で、画面の上部に描かれた山(一部平遠風な山を除く)が、逆の形―上方が山麓になる―であらわされていることである。その中には

懸崖らしいものもあるが、意識的に山を逆に描いている。その理由はともかく、珍らしい図法といえよう。樹木、岩石等の描写は比較的線が太く繊細なところが乏しい。また岩皴も斧劈風になってい

の姿態からだけでなく、むしろ画面全体を覆う稚拙さ、素朴さから云えることで、この絵の特色でもあるが、民衆を対象とした絵画としては、むしろこの方が当を得た表現であろう。しかし、版画としてこの経をみると、版木もかなり摺りへっているらしく、また覆刻の所為もあって、不鮮明なところもあり、線も太く粗目になっていて、必ずしも上作とは云えない。

中国古代版画については、未だ精査しておらぬが、五代から宋元の仏教版画を瞥見すると、清涼寺の釈迦像胎内納入にみられる精緻な彫板の系統のもと、伝香寺の地藏胎内納入の宋版細字法華経扉絵にみられるやや粗雑な彫板の系統のものに大別されるように考えられる。前者は、唐咸通九年（八六八）の金剛般若経扉絵（大英博物館蔵）の伝統をひき、後者は北宋開宝八年（九七五）の呉越王銭俶刻印の宝篋印陀羅尼経扉絵の系統に属すると考えてよいであろう。

『目連救母経』の場合、後者の系統に入るわけであるが、このような稚拙ではあるが素朴の表現は、仏典挿絵としての先例にもあって、久保惣太郎氏蔵や、ペリオ本、スタイン本の敦煌出土十王経、或いは岩崎家蔵の折り本法華経扉絵にも通ずるところである。

て、重厚に描出されている。これらのやや粗い表現はこれが覆刻版の所為でもあるが、原版もまたかかる作風であったことは他の遺品（後述）に徴しても云い得ることである。人物や動物の姿態、表情は、稚拙なうちにも雅味があつて、素朴で誰にでも親しまれる趣きを呈している。この親近感はただ単に人物や動物

これらにみられる、いわば世俗的な親近性は、民間に流布する絵入経典の一般的傾向というべきであろうが、このことはまた、わが国の室町時代末期乃至江戸初期に流布されたお伽草子や絵入本仏書が示す稚拙さ、卑俗さにも共通するところである。民衆を対象としたかかる絵入本――従来の美術史からはとかくはずされて来た――が、民族と時代を越えて、共通するものをもっていることは、注目に値しよう。

地獄の描写は、わが国の地獄絵乃至六道絵とも関連するところであるが、この絵にみる地獄は特定の経論—正法念処経、起世経など—によるものではないようである。

ここにみる罪人は、著衣をつけたものが多く、いずれも首枷或いは捕縄でつながれていて、手足の自由を奪われた者である。この点、中国に原典をもちながらわが国において定着した地獄絵とはいささか趣きを異にしている(後述)。

罪人を責める道具は、わが国の地獄絵と大差ないが、ただ剉確地獄にみる押し切り式截断機を用いて罪人を斬る方法と、足踏み式の臼で鋸齒形の杵によって罪人を搗く方法は、わが国ではあまり行なわれていない⁽¹⁹⁾。

翻って、わが国の地獄絵乃至六道絵を顧りみると、その遺品は奈良時代の東大寺二月堂光背毛彫図までとれるが、古代末、中世の主なものとしては、中尊寺経見返絵、地獄草紙、餓鬼草紙、慶鼎筆地獄変相絵巻、浅田家蔵往生要集絵巻、聖衆来迎寺蔵六道絵(往生要集絵)、禅林寺蔵十界図、金戒光明寺蔵地獄極楽図、原家旧蔵十王図などがあり、その他、北野天神縁起、春日験記、融通念仏縁起、矢田地蔵縁起、光明真言功德絵巻などの絵巻中にもみられ、永年にわたって、わが国絵画史の中に定着してきた。その永い年月の間には、様式的、或いは観照上の変化が当然おこってくるわけで、藤原末期の地獄草紙、餓鬼草紙にみられる一種情感のある画趣をもつ作風が続く一方、宋元仏画の観照方式をとりいれて、凄惨さを克明に描出した作風のもの—その例として聖衆来迎寺蔵六

道絵があげられる—が鎌倉時代になると起ってくる。

しかし、そこに描かれた罪人らの責苦にはさしたる差は認められず、男女とも裸身が多くて、獄卒や猛獣毒蛇に追われて逃げまどい、諸種の責め道具でいためつけられていて、全般的には動きのある場面を示したものが多し。また罪人も、手枷、首枷や捕縄で拘束された姿をとる者は少なく、陸信忠筆と称する十王図の系統をひく諸作品や、新知恩寺蔵六道絵など宋元仏画乃至その影響著しい地獄図と趣を大いに異にしている。すなわち、これら宋元風地獄図は、画題上の制約があるにしても、はるかに動勢が少なく、また罪人は首枷、手枷に繋がれていて、身の自由を奪われた姿をとる者が多いのである。

『目連救母経』にみる地獄図は、ここでのべた本格的な宋元風仏画と、様式的には異った画風を示しているが、罪人の扱い方や、その責め苦の状態などは、これらと共通したところがあり、日本の地獄図とはかなり相違するものである。

次に、目連の持物について述べよう。目連は阿鼻地獄の門を破るにあたって、釈迦から十二鏝錫杖、袈裟、鉢盂を与えられたが、それ以後は、この錫杖を持つ形で表現され、更に頭光が描かれた場合が多くなっている。一見、地蔵菩薩の如き姿をとっている。

地蔵菩薩は冥界における唯一の救済者であり、母を救う目連がこの地蔵の姿をとることはあり得ることであろう。ミシェル・スワミエ氏⁽²⁰⁾によると、一八八一年の序をもつ『目連救母幽冥宝伝』では、目連自身が「幽冥教主地蔵菩薩」の称号を受けており、更にその扉絵の目連は錫杖を持

っているという。このことは、民間仏教において、目連を地蔵に昇格させているのであり、目連と地蔵が混同される傾向があることを示すものである。先述の『大目乾連冥間救母変文并図一卷』において、目連は地獄で地蔵に会い、母の所在をたずねているが、この場合、未だ目連と地蔵の冥界における立場は判然と別れている。しかし、一三五一年序、一六七一年刊行の『慈悲蘭盆目連懺⁽²¹⁾』では、一段の終りごとに「南無地藏王菩薩、南無目連尊者菩薩」と記されていて、両者は救済者としての本性の点でも、またその属する仏教的階級(菩薩、声聞等)の相違も表面的には差別されていない。また、一八五〇年序、一九二九年刊行の『衆喜粗言宝卷⁽²²⁾』でも

鄆都十王判生死 地藏目連管幽冥

天曹三官查功過 城隍土地奏分明

と、地蔵と目連は同格に扱われている。このように、中国における民間仏教では、地蔵に目連は接近し、更に両者は混同視される傾向にあるわけである。

『目連救母経』にみる目連の姿が、地蔵ときわめて似ているのは、以上のような目連と地蔵の混同思想に原因しているためと考えることは可能であろう。そして、この種の混同を造形化したものとして、この絵経は古例の一つと云うことができるのではなからうか。

六 奥書をめぐる諸問題

次に、奥書についてふれよう。

挿図の奥書(公刊参照)は、第一は元の浙東道慶元路鄞県、迎恩門外、焦

目連救母説話とその絵画

君廟界新塘保に住む篤信者、程季六なる人物が辛亥年十月廿二日^{西乙}にこの経を造った由を示す。辛亥年は、年号の記入がないが、十月二十二日^{西乙}の干支から憲宗の元年(二五二)と想定することができる。第二は、大徳八年(一三〇四)五月にこれを広州で購入した某が、普く世人に勧め、幾久しくこれを領伝せんと述べる。

その第三は、わが国にてこの経を覆刻したことを記すもので、貞和二年(一二四六)七月十五日に法祖という僧がこれの重刊を行ない、嶋田、理在、空念、周皎、理住、石塔、赤松、細河、佐々木が助縁したことを明らかにしている。

法祖なる僧の出自、履歴などは明らかにし得ないが、『天竜寺造営記録』に、康永元年(一二四二)十二月二日の天竜寺上棟に際し、首座の春屋妙葩に従って、知客として出席した「法祖」の名をみることができ、これが奥書にみる小比丘法祖と同一人である可能性が強い。

知客法祖は、「法」という系字から、大平妙準の法嗣とみるべきだが、妙準が嘉暦二年(一二三二)閏九月十四日に示寂した後、その門下のうち、妙準とは親交の深い夢窓疎石の門下に転派する者がかなりあり、法祖もその一人であったと考えられている。⁽²³⁾一方、助縁の中にある周皎

挿図2 目連救母経 奥書

も、夢窓会下で、西山の地藏院を塔所とした碧潭周皎とみるべきであり、更に、石塔以下足利幕府の有力者が名を列らねていることから、小比丘法祖を、尊氏の親任あつかった夢窓国師の門下とみることは、ごく自然であろう。

ここで、当時の出版事業について一瞥すると、当時禅林にあつては、所謂五山版が行なわれているわけであるが、その一部は、元からの来朝僧竺仙梵僊を中心とする一類の集団にその源を求めることができる⁽²⁴⁾。先にふれた大平妙準の法嗣で、円覚寺続灯庵の開祖大喜法忻も竺仙に印刷術の教えを受けたと考えられ、円覚寺蔵大般若経を出版するに際して、その一部を刊行した法亀、法機は法忻の法系の人と推定されている⁽²⁵⁾。法祖も夢窓に転派する以前は妙準の会下に法忻と同門であり、このようなことから、法祖も印刷に関心があつたことが推測されるわけである。また、夢窓国師の俗甥で、天竜寺上棟の時に法祖と共に出席した春屋妙葩も、かつて竺仙の下で学び、竺仙を中心とした出版事業をうけついで、天竜寺雲居庵蔵版や、臨川寺蔵版の諸本を刊行したことは、世に知られるところである。

このようにみえてくると、法祖の出版関係の環境は、やや明らかになつてくるが、奥書にみる助縁の石塔、赤松、細河、佐々木はいずれも幕府の要職にあつた諸氏と同姓であり、また、島田氏も、幕府奉行人に越中五郎の呼名をもつ人物がみられるところから、この経の出版は、幕府要人と何らかの関係があつたのではないかと推測したくなる。しかし、これ以上の推測を加えることはさしひかえる方が無難であろう。

なお、鎌倉室町期の経本の版画で現存するものはかなりあるが、刊記

があつて、挿絵が全巻にわたつて行なわれたものとしては、世に知られる遺品⁽²⁶⁾の中でこの『目連救母経』が最も古いことをつけ加えておく。

七 目連救母経と絵巻

最後に、わが国における目連説話の絵巻についてのべて、本稿を終ることにしたい。目連説話を描いたものとしては、『三宝絵詞』(九八四年編)にみえるものが最も古いようである。しかし、残念ながら、絵は遺っていない。

遺品としては、曹源寺旧蔵餓鬼草紙(現京都国立博物館保管)の第三、四段に収められた図が、現在知られる唯一の作品で、十二世紀後半の製作と考えられている。その内容は左の通りである。

目連はしめて六通をえて、亡母の恩をむくひ□とおもひて、その生處をみるに、餓鬼の中にむ□^まれたり、目連かなしひなきて、鉢に食物をいれて、母のところゆいて、これをあたふ、母えて食せむとするに、いまたくちにいらざるに、ほのほとなりぬ、目連かなしむて、ほとけのみもとにまうて、母をすくふへきはかりことをとひたてまつる

〔絵〕 大河のほとりて目連母に食物を与えるが、火となつてもえあがる。

目連鷲峯山の釋迦のもとに参ずる所。

ほとけこたへてのたまはく、なむち飲食をまうけて自恣の僧を供養して、そのこりをもては□^まあたへは、おのつからうることもありなむ、目連佛の御おしへのままにして、食物をもてゆきて母にすすむるに、ほむらになることなくして、こころのままに食することをえたり

〔絵〕 大河のほとり、目連に与えられた食物の上に坐る母と、食物をねだる餓鬼三匹。

この内容はいうまでもなく『孟蘭盆経』にもとずくところであるが、後段の、母が食物を入れた鉢の上に坐して、これを独占して、他の餓鬼にこれみよとばかり食している有様は、説話的要素がかなり加わった表現といえよう。しかし、他の変文なり、更に発展した目連説話の影響は未だ入っていないように考えられる。

次に、時代は降るが、『看聞御記』に名のみとどめる「目連尊者絵」は、この『救母経』と何らかの関連があるように思われる。すなわち、看聞御記永享十年六月十日条に

内裏より又目連尊者繪三局。奥書云 筆者長官前大藏権少輔從五位下 給之。殊勝繪也 藤原光益。嘉慶二年六月 日。 殊勝筆跡也。又和田左衛門尉平義盛繪七局。浅井三郎義秀幕 府住所門破事。同給。是等自 室町殿被進云云。殊勝繪也。握翫無極。

と記載された「目連尊者絵」は、嘉慶二年（一三三八）の製作で、三巻本であり、もと室町殿にあったわけであるが、『救母経』を和文にして、絵巻形式に展開させると、三巻程度の絵巻になりはしないであろうか。

この経が日本で貞和二年（一三四六）に覆刻され、また、これが幕府の要人と因縁浅からぬ出版とすれば、絹絵で室町殿に蔵されていたという嘉慶二年（一三三八）の「目連尊者絵」と何らかのつながりを予想することは可能である。

經典の和文、延書は鎌倉時代から南北朝にわたり、多く行なわれており、更に絵画を挿入して絵巻にしたものとしては、鎌倉時代中期の遺品に「法華経絵巻」があり、また、南北朝末室町初期の作と考えられる「往生要集絵巻」が知られている。

このような傾向にある時、説話的内容の豊富な『目連救母経』の和文

化、絵巻化は、ごく自然におこなわれたであろうと考えられる。また、『京都御所東山御文庫記録』甲二百十四に

目連尊者繪詞元長卿筆敷 一冊

とある絵が、嘉慶二年の「目連尊者絵」と同一か否か明らかにし得ないが、これら文献にみる「目連尊者絵」の主内容が、救母説話であるとすれば、説話として内容が充実している『救母経』に基づく可能性が強いとみてよいであろう。

『三国伝記』所収の目連説話が、この経によるものであり、また南北朝期の「目連尊者絵」がこの経に基づくとする仮定が許されるならば、まさに貞和二年覆刻の『目連救母経』がわが国の文学、絵画に及ぼす影響は甚だ大とすべきである。

なお、室町以後のお伽草子、説経節などの文芸にみられる目連救母説話については、内容的にもかなり発展しており、この経と異なる点が多いので、ここでは敢てとりあげないことにした。

目連救母経法量表
(単位センチメートル)

縦	33.3
上欄外	5.0
絵	10.3
本文	12.7
下欄外	5.3
横	596.3
1 (見返)	27.5
2	52.6
3	52.3
4	52.7
5	52.5
6	31.8
7	40.7
8	52.7
9	52.8
10	52.6
11	52.7
12	52.2
13	23.2

註

- 『日本書紀』推古天皇十四年（六〇六）の記事に「自是年二初毎寺、四月八日七月十五日設齋。」とあり、わが国における孟蘭盆会の始めとされている。
- 京都国立博物館蔵 曹源寺旧藏本第三、四段
- 主要な論文をあげると次頁の通りである。

倉石武四郎	目連救母行孝戯文に就て	支那学3の10	大正一四・二
青木正児	燉煌遺書「目連縁起」「大目乾連冥間救母変文」及び「降魔変押座文」に就て	支那学4の3	昭和二・九
倉石武四郎	「目連変文」紹介の後に	〃	〃
本田義英	孟蘭盆経と浄土孟蘭盆経	竜谷大学論叢276	〃二・一〇
川口久雄	敦煌変文の素材と日本文学—目連救母変文・降魔変文—	日本中国学会報8	〃三一・一〇
金岡照光	中国民間における目連説話の性格	仏教史学7の4	〃三四・二
金岡照光	目連変文	勁草書房「中国の名著」所収	〃三六・一〇
ミツシエル・スワミエ	地藏の獅子について	東方宗教19	〃三七・八
小川貫弍	目連救母変文の源流	仏教文学研究2	〃三九・二
岩本裕	目連救母伝説攷	国語国文35の9	〃四一・九
永井義憲	説話の移植とその変容—目連救母説話考—	同著「日本仏教文学研究」所収	〃四一・一〇
岩本裕	目連「地獄めぐり」説話の源流	仏教文学研究5	〃四二・五
岩本裕	目連伝説と孟蘭盆	宝蔵館	〃四三・九

- (4) 岩本氏「仏教文学研究」5所収論文、註(3)参照。
- (5) 註(3)にあげた諸論文で、『目連救母経』の内容に言及したものはない。
- (6) 本稿執筆中、昭和四十三年五月十一日に、美術史学会第21回総会（於東京大学）において、本稿と同題目で発表した。
- (7) 弘安六年、七年の年記をもつ氏子や僧尼の夢想記（起請文）が七点書写されており、その筆跡はかなり古く、鎌倉期に入るものと考えられる。更に文字にこすられた形跡があり、従って、夢想記の紙背を利用して、印刷したことは明らかである。
- (8) 鄭振鐸『中国俗文学史』下 作家出版社 一九五四年・北京 所載
- (9) 南宋紹興一七年（一一四七）序、孟元老著。
- (10) 本田義英「孟蘭盆と浄土孟蘭盆経」竜谷大学論叢二七六 にペリオ将来本の『浄土孟蘭盆経』が抄録されており、この経についての記述はそれによった。
- (11) 岩本氏「国語国文」35の9 所収論文、註(3)参照。
- (12) 川口久雄氏「日本中国学会報」八 所収論文による。註(3)参照。
- (13) 註(3)川口氏論文。
- (14) 王重民外著 人民文学出版社 一九五七年・北京。
- (15) 同書三一八頁—三二七頁。
- (16) 註(3)倉石氏論文参照、及び京都大学中国文学研究室蔵『新刻出相音註勸善目連救母行孝戯文』参照。
- (17) 王伯敏『中国版画史』上海人民美術出版社 一九六一年・上海 参照。
- (18) 例えば談山神社蔵 細字法華経見返（『美術研究』二二三号掲載）や宋版をわが国で模刻した法華版経の扉絵にみる画面構成はいずれも充填式構図法である。
- (19) 足踏み式白の刑は、中国風の表現をもつベゼクリク第八寺院趾壁面地獄図にみられるほか、高野山宝寿院本『預修十王生七経』の第八平等王の場面にみられる（『大正図蔵』第七卷 六五九頁）。いずれも中国画に基いての製作である。
- (20) M・スワミエ「地藏の獅子について」東方宗教一九
- (21) 註(20)参照。
- (22) 註(20)参照。
- (23) 玉村竹二『夢窓国師』（サーラ叢書10）平楽寺書店 昭和三十三年一〇月二〇四頁参照。
- (24) 玉村竹二「諸偏類要」をめぐる諸問題」『岩井博士古稀記念 典籍論集』所収 昭和三八年六月。
- (25) 貫達人「円覚寺蔵大般若経刊記等について」金沢文庫研究八の二〜一。昭和三十七年二月〜一月。
- (26) 慶長以前の経本版画で刊行年代の明らかな遺品について奥木正亨氏は「経本と書籍の版面」（『日本版画全集』第一巻「古代版面」講談社 昭和三十六年九月）に一六点をあ

けておられるが、それに『目連救母經』を加えて表記すると左のようになる。

仏名經	文治三(一一八七)	墨書	印仏
首楞嚴經	延応一(一二三九)	刊記	見返繪
梵網經	文永四(一二六七)	刊記	見返繪
大般若經	弘安二(一二七九)	墨書	見返繪
目連救母經	貞和二(一三四六)	刊記	見返・挿繪
法華經	貞治四(一三六五)	刊記	見返・卷末繪
大般若經	永徳三(一三八三)	墨書	見返繪
父母恩重經	永徳三(一三八三)	刊記	挿繪

公刊

原文は一行十二字語であるが、公刊に際してはこれによらない。但し、改行個所は原文通りにした。原文には句読点が施され、所によつては返り点、送り仮名がつけられているが、徹底を欠くので、句点のみにとどめた。また異体文字は現行の書体に改めた。

佛説目連救母經

昔王舍城中。有一長者。名曰傳相。其家大富。馳驢象馬。遍山蓋野。錦綺羅紈。眞珠滿藏。諸頭放債。莫知其數。長者語常含笑。不逆人情。六度之中。常行六波羅蜜。長者忽然染患。遂即身亡。夫婦二人唯養一子。名曰羅卜。見父亡歿。葬於阿爺山所。三年服滿。來啓阿娘。阿爺在日。錢財無數。即今庫藏。並欲空虛。兒欲將錢出往外國經紀。遣奴益利運將錢本出。有三千貫文。分作三分。一分留與阿娘。供給門戶。一分留與阿娘。供養三寶爲爺日設五百僧齋。兒將一分往金地國。興生經紀。慈母見子行去。喚聚奴婢。汝來我今家中大富。若有三寶師僧。來我門前。教化爲我。將棒打懲。莫留性命。將我兒設齋錢。廣買猪羊鵝鴨雞犬。餒飼令肥。懸羊柱上。刺血臨盆。縛猪棒打。哀聲未絶。劈腹取心。祭祀鬼神。作諸快樂。羅卜將一千貫錢本去得三年。尅得三千貫錢利。廻歸本國。

公刊 目連救母經

大般若經	明徳二(一三九一)	墨書	見返繪
藥師本願經	応永一九(一四二二)	刊記	見返・挿繪
法華經	応永一九(一四二二)	墨書	見返繪
阿彌陀經	応永三三(一四二六)	刊記	見返・挿繪
金剛般若經	応永三三(一四二六)	刊記	見返・卷末繪
法華經	永享五(一四三三)	刊記	見返・卷末繪
大般若經	大永三(一五二三)	修補 墨書	見返繪
藥師本願經	天文七(一五三八)	刊記	見返繪
地藏十王經	文祿三(一五九四)	刊記	見返・挿繪

離家四十餘里。在城西柳樹下歇。遣奴益利。先往歸家。啓白我娘。若作善事因緣。我將此錢歸供養娘。若作惡業因緣。我將錢爲娘捨施。益利歸到家中。金支遙見。走報阿婆郎君歸矣。婆問金支。汝那得知。金支答言。門前見益利。知道郎君歸矣。婆遣金支。汝且關門。莫與奴進。待我開庫藏。取幡圖帳設。後園假作設齋所在。開門引奴進語。言益利曰。我從汝共郎君行去已後。我在家中。日設五百僧齋。汝若不信。向後園佛堂前。看我設齋所在。匙筋交橫。香煙雜亂。椀椀收拾。猶未得了。益利走報郎君。婆也不是凡人。婆在家中每日。設五百僧齋。羅卜問言。益利汝那得知。歸到家時。正是匙筋交橫。香煙雜亂。僧徒並散。收拾猶未得了。羅卜時聞此語。心生慙愧。我且遙空頂禮阿娘。一千餘拜。時有東隣西舍。鄉閭眷屬。聞道羅卜歸家。出城迎接。見郎君禮拜不起。問言郎君。前頭無佛。後復無僧。禮拜何者。羅卜答言。慙愧阿娘在家中供養三寶。日設五百僧齋。鄉隣答言。汝母從郎君行去後。婆在家中。棒打三寶師僧。將汝設齋錢。廣買猪羊鵝鴨雞犬。餒飼令肥。懸羊柱上。刺血臨盆。縛猪棒打。熱湯腿身。哀聲未絶。劈腹取心。祭祀鬼神。作諸歡樂。羅卜遂聞此語。舉身自撲。百毛孔中盡皆流血。悶絕在地。良久不蘇。母見兒歸。出相迎接。唯見兒倒地不起。把兒手語兒曰。汝聽我發誓言。江水蕩蕩有流波。成人者少。敗人者多。我從汝行去已後。日不爲汝設五百僧齋。令我還家。便得重病。不過七日。死入阿鼻大地。

獄。羅卜聞母發願誓重。遂起歸到家中。阿娘忽然而重病。不過七日。遂乃身亡。羅卜送阿娘山所。結草爲庵。守母墳靈三年苦行。白日提籠擔土。加母墳靈。夜間轉誦大乘經典。聲聲不絕。感得九色鹿子來現。白鶴呈祥。慈鳥眼中出血。百鳥嚙土。來助墳靈。羅卜見鳥嚙土。心生歡喜。覓得工匠。塑成佛像。供養三年。孝服將滿。即辭墳靈。而去至耆闍崛山中。見世尊。羅卜白佛言。世尊。父母今已亡歿。孝服將終。心願隨佛出家。有何功德。世尊喚言。善來羅卜。南閻浮提中。若捨一男一女。一奴一婢。隨佛出家。勝造八萬四千浮圖寶塔。現世父母福樂百年。七代先亡當生淨土。何況自發菩提之心。即遣阿難。剃除鬚髮。世尊摩頂受記。改名大目犍連。我有十大弟子中。神通最爲第一。目連白佛言。世尊。寶塔浩大。功德如何。世尊答言。目連。寶塔高大。簷簷相接。徹至梵天。百年之後。雨漏佛面。當來獲罪。出家功德。是金剛不壞之身。目連白世尊。今欲辭世尊入山學道。世尊答言。目連。汝若要修道。不用餘處。向我耆闍崛山中修道。目連啓世尊。山中有何糧食。堪得學道。佛言目連。山中唯有虎狼禽獸。每到齋時。口嚙香花自來供養。目連聞是語已。擲鉢騰空往到耆闍崛山中。至寶鉢羅庵中。左脚壓右脚。右脚壓左脚。以舌主上齶。觀三十三天。至化樂天宮。唯見阿爺受天福。不見阿娘。迴來啓世尊。阿娘在生之日。道我日設五百僧齋。死合生化樂天宮。天宮不見。今在何處。佛語目連。汝母在生之日。不信三寶。慳貪積惡。造罪如須彌山。死入地獄中。目連遂聞此語。舉身自撲。悲啼號泣。從地而起。遊諸地獄。

目連次復前行。見一剉確地獄。只見南閻浮提衆生。在剉確白中。斬身千段。血肉狼藉。每日之中。萬死萬生。目連悲哀。問獄主此地獄衆生前身作何罪業。今受此苦。獄主答師。此是南閻浮提。剉斬一切衆生。男女盤旋。聚頭共喫。口唱甘美。今落弟子手中。只得歡喜忍受。

目連次復前行。見一劊樹地獄。南閻浮提衆生。在劊樹頭。手攀劊樹。百節零落。脚踏刀山。千肢俱解。目連悲哀。問獄主。此獄衆生前身作何罪業。今受此苦。獄主答師。此南閻浮提。不信因果。串鍊衆生。男女盤旋。聚頭共喫。口唱

甘美。今落弟子手中。只得歡喜忍受

目連次復前行。見一石礮地獄。兩塊大石。礮諸罪人。血流迸散。目連悲哀。問獄主。此獄衆生前身作何罪業。今受此苦。獄主答言。此是南閻浮提衆生。多煞蟲蟻。殺害無量。今落在弟子手中。只得歡喜忍受。

目連次復前行。見一隊餓鬼。頭如太山。腹如須彌。咽喉如針。行步之間。常作五百破車之聲。目連復問餓鬼。汝等前身作何罪業。鬼復答師。我前身爲貪亡齋。不敬三寶。長劫不聞漿水之名。不見飲食之味。故獲斯報。

目連次復前行。見一灰河地獄。一切南閻浮提衆生。在灰河中。奔波迸走。遍身焦爛。見東門開。走向東門。東門復閉。見西門開。走向西門。西門復閉。見南門開。走向南門。南門復閉。見北門開。走向北門。北門復閉。如是波波馳走。

更無休息。目連問獄主。此獄衆生前身作何罪業。獄主答言。此人前身爲火炮雞子。今落弟子手中。只得歡喜忍受。

目連次復前行。見一鑊湯地獄。只見南閻浮提衆生。在鑊湯中。波濤湧沸。煎煮罪人。目連悲哀。問獄主。此獄衆生前身作何罪業。今受此苦。獄主答師。此人南閻浮提衆生。不信三寶。生大富長者家中。煎煮衆生。今落弟子手中。只得歡喜忍受。

目連次復前行。見一火盆地獄。只見南閻浮提衆生。頭戴火盆。百節骨頭。炎炎火出。目連悲哀。問獄主。此獄衆生前身作何罪業。獄主答師。此是南閻浮提衆生。要喫衆生骨髓。今落弟子手中。只得歡喜忍受。目連高聲。大叫阿娘。娘在生之日。道我日設五百僧齋。香花飲食。非不如法。死合生化樂天宮。天宮不見。合在地獄。地獄不見。獄中一萬四千牛頭獄卒。各相謂言。前門有生人聲。必是南閻浮提送罪人來矣。我將鐵叉。望心押取將來。目連正在地獄門前。頓悟坐禪。身發三昧。獄主叫喚口聲。目連從禪定起。問師是何人。來我地獄門前。目連答言。莫嗔貧道。貧道特來。尋討阿娘。獄主問誰道阿娘在此。答言。釋迦牟尼佛道娘在此。獄主問師。釋迦牟尼佛是師何眷屬。目連答言。便是本師和尚。我是弟子。大目犍連。獄卒聞是語已。低頭放却鐵叉。頂禮一千餘拜。讚言。善

哉善哉。今日果報。得見釋迦牟尼佛弟子面。問師娘何姓名。爲師往獄中檢簿尋看。獄主人司檢簿無名。出來報師。今往獄主檢簿無名。前頭又有大阿鼻地獄。目連次復前行。見一大地獄。牆高萬丈。黑壁萬重。鐵網交加。蓋覆其上。上面又有四大銅狗。口中常吐猛火。炎炎燒空。叫得千聲。殊無人應。迴來問獄主。前頭有大地獄。牆高萬丈。黑壁萬重。鐵網交加。叫得千聲。無人出應。獄主答師。師法力微小。要此門開。無過問佛。目連聞是語已。擲鉢騰空。往到佛所。繞佛三匝。白佛言。世尊。目連見大地獄。牆高萬丈。黑壁萬重。叫得千聲。無人應矣。佛語目連。汝執我十二鏢錫杖。披我袈裟。掌我鉢盂。至地獄門前。振錫三聲。獄門自開。關鎖自落。獄中一切罪人。聞我錫杖之聲。皆得片時停息。目連披得袈裟。手持錫杖。至地獄門前。振錫三聲。獄門自開。關鎖自落。目連突入獄中。獄卒推出。師是何人。擅開此門。此門長劫不開。目連問獄主。此門不開。罪人從何而入。獄主向師道。南閻浮提。多行不孝。多行三逆。不信三寶。命終之後。被業風吹之。倒懸□下。不從門來。獄主復問。阿師之何到此。目連答言。特來尋討阿娘。獄主問師。誰道師娘在此。目連答言。釋迦牟尼佛道娘在此。本師釋迦牟尼佛是師何眷屬。目連答言。便是本師和尚。獄主問師。娘何姓名。爲師往獄中。檢簿尋看。目連答獄主。王舍城中傳相長者妻。青提夫人。姓劉第四。獄主人獄。遂喚王舍城中青提夫人姓劉第四。門前有出家兒。法名大目捷連。是佛弟子。大不可思議。若是汝兒。非久得離地獄。獄主又問。王舍城中。青提夫人。汝何不應。罪人應曰。恐獄主移向苦處。罪人不敢應言。罪人唯一子。身不出家。不名大目捷連。獄主出來報師。有一青提夫人。道兒不出家。不名大目捷連。目連答言。獄主大慈大悲。信知道不識兒。父母在日。小名羅卜。爺娘死後。投佛出家。得佛改名大目捷連。獄主問師。今日尋得娘兒。將何報答弟子之恩。目連答言。今日得見阿娘。請諸菩薩。轉大乘經典。報答獄主之恩。獄主向罪人言。吾助汝喜。門前覓者。正是羅卜。罪人應曰。若是羅卜。即是懷抱。寸腸之子。此時獄主將鐵叉挑起打釘落地。百毛孔中盡皆流血。更著鐵枷刀劍。圍遶放出。與兒相見。問師還識。娘否。目連答言。不識娘。前

頭遍身猛火鎔鎔。便是師娘。目連知是阿娘。大叫阿娘阿娘。在生之日。道我日設五百僧齋。香花飲食。非不如法。死合生化樂天宮。天宮不見。却在地獄。兒日日每到齋時。有異種甘甜。先將來供養阿娘。阿娘形容何得大極劣瘦。阿娘喚言。我兒嬌子嬌子。長劫不見嬌兒。何得今朝恰在地獄門前。與兒相見。娘在獄中受罪辛苦。飢吞鐵丸。渴飲銅汁。語猶未了。獄卒把定。長釘釘身。煎煮腸肚。獄中罪人。各相謂言他家子母。向得相見。我等云何。無有出期。獄主答師。不得與娘久停說話。汝阿娘受罪時至。師若不放阿娘。我快鑪鐵叉望心挿取將去。目連放却阿娘。被獄主駁入獄中。喚言我兒嬌子嬌子。苦痛難忍。百方作計。救取阿娘。目連左脚在門闕內。右脚在門闕外。聞叫苦痛之聲。將頭牘柱。血肉狼籍。告獄主言。欲入獄中。代娘受罪。獄主答言。師娘業力廣大。事不相干。欲要出地獄。無過告佛。目連聞是語已。擲鉢騰空。往詣佛所。遶佛三匝。白佛言。世尊。目連娘在獄中受罪辛苦。如何救得阿娘。出離地獄。世尊答言。目連我救汝母。目連問言。世尊。還救得否。世尊答言。我若救汝母不得。長劫入地獄中。代汝娘受罪。爾時世尊。領諸徒衆。比丘比丘尼。優婆塞優婆夷。無數億萬。前後圍遶。散虛空身。高七多羅樹。放眉間五色毫光。照波地獄。鐵床化作蓮華座。劍樹化爲白玉梯。鑊湯化爲芙蓉池。爾時閻羅大王。作如是語。讚曰善哉善哉。我親得禮拜燃香。還成不信有佛勅牛頭獄卒。盡皆放生天。目連又問。世尊。一切罪人盡得生天。阿娘托生何處。佛答目連。汝母在生之日。罪根深重。業障未盡。出大地獄。却入小黑闇地獄。諸菩薩僧齋餘剩飯賜汝一鉢。往獄中餉母。目連接得飯。往獄中。母見飯。貪心不改。左手接飯。右手遮人。飯來入口。依前變成猛火。目連問世尊。如何得離黑闇地獄。世尊答言。要娘離黑闇地獄。請諸菩薩。轉大乘經典。方得離黑闇地獄。目連即依佛勅。請諸菩薩。轉大乘經典。娘得出黑闇地獄。又生餓鬼中。目連欲告世尊。娘出黑闇。托生何道。世尊答言。離地獄中。托生餓鬼中。目連問世尊。娘在獄中。欲共娘往恒河水邊。飲水洗腹。世尊答言。諸佛飲水。猶如乳酪。衆僧飲水。猶如甘露。十善人飲水。能解飢渴。汝母飲水。變爲猛火。流入腹中。煎煮腹肚俱爛。目連啓世

尊。如何得娘離餓鬼。世尊答言。請諸菩薩。點四十九燈。放諸生命。造立神幡。得娘離餓鬼。目連即依佛勅。請諸菩薩。放諸生命。造立神幡。點四十九燈。得娘離餓鬼身。目連告佛。我母托生何道。佛言目連。雖離餓鬼。托生今在王舍城中。化爲母狗。目連聞是語已。挺鉢往王舍城中。呼覓其狗。狗見目連。走出抱腰懊惱。我是師母。師是我兒。目連問母。今作狗身之苦。何如地獄之苦。狗語目連。我乍可長劫作狗身。喫人不淨。我怕聞地獄之聲。目連又問世尊。娘作狗身辛苦。如何得娘離狗身。世尊答言。目連取七月半日。造取孟蘭盆齋。得娘離狗身。目連問世尊。何故不取三十四。要取七月十五日。世尊答言。目連七月十五日。是衆僧解夏之日。歡喜俱會一處。用□汝母當生淨土。目連即依佛勅。市買楊葉栢枝。造得孟蘭盆齋。得娘離狗身。目連娘於佛前。受五百戒。願娘捨邪心歸正道。感得天母來迎接得。娘生忉利天宮。受諸快樂。當揚說法。度脫衆生。若有善男善女。爲父母印造此經。散施受持讀誦。令得三世父母。七代先亡。即得往生淨土。俱時解脫。衣食自然。長命富貴。佛說此經時。天龍八部。人非人等。皆大歡喜。信受奉行。作禮而退。

佛說目連救母經終

大元國浙東道慶元路鄞縣迎恩門外焦君廟界新塘保經居亦

奉三寶受持讀誦經典弟子程季六名臣正 辛亥季十月廿二日乙酉呈

甲辰年大德八年五月 日廣州買到經典普勸世人行年幾領傳之

大日本國貞和二年歲次丙戌七月十五日重刊 小比丘法祖

助緣嶋田理在空念周咬理住石塔赤松細河佐々木

(墨書)

永祿元年三月吉日主持仙譽祖寶

(花押)

(軸付印行)

印板在京五條坊門□□大藏房 造經之料足合八十文也